

# PRO-LIFE

## 胎児を守る運動

### 中絶に反対する運動

2000年1月 No.111

# 死の文化と戦おう

人類は、無限の進歩を手中にしたような自信で今世紀を迎えました。ところがどうでしょう！ 世紀末を迎える人類は恐怖と道徳的混乱に取り囲まれています。精神の春を欲するのであれば、わたしたちには希望の基礎を再発見する必要があります。なかんずく、社会は再度、生命の賜物を受け止め、慈しみ、守ることを学び、生命を蝕む死の文化の攻撃を撃退しなければなりません。死の文化はそれ自身が現代を脅かす恐怖の具体化に他なりません。

第二バチカン公会議は夫婦の愛を雄弁に解き明かし、生命の文化に貴重な貢献を果たしました。公会議に促された教皇パウロ六世がその教えをさらに立ち入って説明したのがあの預言的回廊「フマネ・ヴィテ」です。そこで、教皇は世界に新しい生命を生み出すに当たって神と協力する力が持つ倫理的意味合いを説かれました。神は、愛の中に互いを助け合うために男女を創造なさいました。彼らの結びつきは神の創造の業に与えることにはかきりません。夫婦愛は、新しく生命を生み出すだけでなく、新しい生命が比類なく価値ある贈り物として心から歓迎される愛に満ちた環境を提供する、という意味でも生命に仕えます。

過去四半世紀、生命を守るために多くの人たちが努力してきました。プロ・ライフ運動はその最たるものの一つです。しかし、これほど多くの人たちの

献身的努力にもかかわらず、人工妊娠中絶が権利であるという主張がなされ続けます。それだけではありません。中絶手術の際実際にどういふことがなされるかについて、想像できかねるような無感覚の兆しが見受けられます。その一例がいわゆる「パーシャル・パース・アポーション」にまつわる最近の出来事です。わたしたちはこういふことに決して無関心であってはなりません。極初期段階の人間の生命を大事にしない社会は、すでに死の文化に戸を開け放っています。どのような状況、目的、法律があつたとしても、妊娠中絶がどれほどひどい犯罪であるかについてわたしたちは決して妥協してはなりません。

生命を守る人たちは、妊娠中絶に代わる選択をますます目に見えるものにし、入手可能にする必要があります。同じく、わたしたちが生命を無条件に守るのであれば、そこには真の癒しが可能であるというメッセージも常に含まれなければなりません。「望まれず」に見捨てられた子どもたち、困難に面している若者たち、身体障害者、だれからも面倒を見てもらえない人たちに、わたしたちが心と家庭を開く用意がなくてはなりません。

同じく、医師が介助する自殺と安楽死の合法化を進める怪しげな運動について、教会が社会の関心を自覚めさせることができれば、国家に貴重な貢献

をしたこととなります。安楽死と自殺は神の掟への重大な違反です。こういふことが合法化されると、自分を守るべきでない人たちの生命は直接脅威に晒されることになり、それは社会の民主主義的制度にとって最も有害です。

耐え難い負担であり、危険で、予想される結果と均衡が取れない治療を中止すること、栄養と水分の補給、通常の医学的治療などのような生命維持に必要な治療を停止することの間にある本質的な倫理的区別を、教会がさらに明確にする努力が必要です。患者の死を招く意図で栄養と水分補給を停止するのであれば、それは許されません。関連があるすべての要因を注意深く考慮に入れながらも、全患者に必要とされる医学的手段による養分と水分補給が基本的選択でなければなりません。この区別を曖昧にすることは、すでに病気や老齢で苦しんでいる患者と家族に、無数の不正とさらなる苦しみを与える原因になります。

生命、死、苦しみの意味を理解しかねている世界にあつて、キリスト教的メッセージはキリストのいい知らせ、つまり福音にほかなりません。キリスト信者には御父への従順を示す究極の行為として死を受け入れ、御父だけが知る死の「時」に死と対面する心構えがあります。

受胎の瞬間から自然死に至るまで、

奪つことが許されない生きる権利支持の本質的特徴の一つは、胎児、障害者、老人、治癒不可能な病気に苦しむ人たちに法的保護を提供することです。落ち度がない人間の直接殺害を合法化する法律は、すべての人間にある犯されてはならない生命権に真っ向から反するものです。こういう法律は法の下での平等を否定します。

国家の生命はその物質的発達と世界におけるその権力以上のものです。国家は「魂」を必要としています。それは歴史を通じての進歩に付き物の道徳的病と霊的誘惑に打ち勝つために英知と勇気が必要とします。

民主主義はそれが包含、推進する価値観によって浮き沈みます。生命を守るあなたはこのヴィジョンにある本来の大事な部分を守っていることなのです。どの国もすべての胎児、障害者、死に面している病人を大事にしなければなりません。

教皇ヨハネ・パウロ二世の教話から  
一九九八年十月五日





# 死ではなく生を返ぼつ

カルカッタのマザー・テレサがその生涯を終えて、私が心配しているのは、インドの家のない人々や子ども達や死に行く人々のことである。彼らの代弁者兼保護者である人がいなくなって、誰が「もっとも貧しい人々」の心配をするのだろうか。世界中で毎日のようにいろいろな選択肢が生まれている。インドでは、幼い女兒殺害、中絶、安楽死などの選択肢も与えられている。しかし、ほかの選択肢もまた生まれている。若いインド人のカップルが性行為を行った。



その結果、妊娠したが、二人には子どもを育てることができない。二人は結婚していないのかもしれないし、子どもを育てる経済的余裕がないのかもしれない。理由はさまざまだろう。どうすべきか何度も検討された。このケースにはどのような選択肢があるのか。そして二つの選択肢が考えられた。子どもを育てるか、養子に出すかである。

インドの裏側、アメリカでも別の選択肢が下されていた。ある子ども好きの女性が、一人か二人ほど養子を望んでいた。だが、独身女性であるという理由から、アメリカ国内では肉体的または精神的にハンディ・キャップのある子どもか、ある程度成長した子どもしか希望できず、あとは国際養子を求めるしかないという。看護婦で独身であるその女性は、国内の子どもを養子にするのは難しいと分かったので、国際養子を求めることにした。ここでも、独身の彼女の選択余地は狭かったが、インドは門戸を開いてくれた国の一つだった。一九八二年九月十八日、インドで一人の赤ん坊が生まれ、病

院に置き去られた。病院はその女の子の面倒を見ることにした。そして、カルカッタの孤児院「希望の町」のコーディネーターが、その子を引き取り、養子に選ばれるまで育てることに決めた。二ヶ月後、飛行機の乗務員達がボランティアを引き受けてくれ、彼女はアメリカに送られた。彼女は喜んで養子親を迎えられた。彼らはこの日を四年間も待ち続けていたのである。

私がここに来てから十五年経った。マザー・テレサが私の故郷で亡くなって以来、自分の人生を見つめ、中絶に関わる事柄、つまり選択について考えるようになった。私の場合は、すばらしい選択に出会うことができた。神は私をお創りになり、私の産みの母親は私を産み、養子に出すことを選んでくれた。私の養母は、そのことを言うとき、お気に入り詩の詩を引用する。

**私の肉ではない肉、私の骨ではない骨**

だけ私の体内にあるもの  
一瞬をいとも忘れはしない  
あなたは私の心臓の下で  
育ったというより、  
育ったというより、

## 私の心の中で育ったという

ティーンエイジャーになって、世間や仲間の考えと個人の信念が衝突し合うようになり、私自身が選択しなくてはいけなくなった。自分の考えを貫こうか？それとも、みんなと合わせようか？ティーンエイジャーのこういうジレンマは、ずっと昔から存在しただろうが、今のほうがもっといろいろな危険な選択肢があふれている。産児制限の方法は、おそらくティーンエイジャーの「望まれない妊娠」を減少させるために考えられたものではないかと思つ。でも、統計によると、産児制限がこれほど急速に浸透する前に比べ、ティーンエイジャーの妊娠率は高くなっている。

私はまだ15歳だから、手術、化学療法、輸血などの際には、母の同意が必要である。なのに、中絶には誰の同意も必要ないのは変ではないだろうか？この状況って何だろう？中絶の権利って何？

マザー・テレサがこれらの仕事を始めたとき、彼女はただの女性に過ぎなかった。彼女は誰かに言われてインドの貧しい人々の面倒を見るようになったわけではなく、自分で生涯の仕事を選んだ。私も普通の女の子に過ぎないけれど、中絶が暴力



行為であることをほかの人に理解させることによって、普通以上になれるでしょうか。難しいかもしれませんが、でも、私自身の自信と信念を持ち続け、ほかの人も生を選択できるように、彼らを助け、自分を尊重するようにし向けることでやってみることはできるだろう。ドラッグ、婚前交渉、暴力、中絶は、私の選択肢にはないものである。責任ある選択とは、自己の損得を考えない愛から生まれるものだと知っている。考えてみてください。ガンジーが中絶されていたらどうだったでしょう。キューリー婦人が中絶されていたら？チャールズ・ディッケンズが中絶されていたら？ベートーベンが中絶されていたら？そしてあなたの母親が中絶されていたら？



数カ月前に若い十代の少女が

三人の警官に自宅から警察署に連行されたという記事を読んだ。

最初、私は「おいおい、一体何事だ?」と思って、残りを読んでみると、その少女は中絶をしよう

としていて、それを危険すぎると診断した医師の忠告で、警察は彼女の安全のため身柄を拘束したというのである。少女は翌日には両親の元に返され、少年

審判所は両親に少女を中絶をさせないという同意をさせた。二ヶ月後、少女は元気な女の子

を産んだ。

この小さなドラマの中には数人の役者がいる。まず少女とその両親で、彼らは中絶の「選択」を望んでいた。次に少女のボーイフレンドとその両親。中絶は絶対にして欲しくないと主張していた。少女の健康を心配していた医師。それに裁判所の役人やアメリカ合衆国のネブラスカ州少年審判所。この若い少女のおなかの中にいた赤ん坊の命を助けたこれらすべて

## 正しい選択

L. C. マッキレン

何も悪くないと奴らは言う  
僕（私）が生まれる前だから  
一体誰に権利があって  
僕の体をバラバラにするの  
その上 僕のお母さんに念を押す  
涙を流す必要はないよと...  
でもお母さんは一生僕の叫び声を聞き続ける  
僕がこの世にいなかった後でも

怖いよ だれもそばにいてくれない  
真っ白に輝く壁に囲まれて  
僕はあまりの痛さに  
外まで響く大声で泣いてしまうかも  
それでも奴らはおかまいなしに  
小枝のように僕の頭をへし折るだろう  
誰も奴らの血みどろ行為を止めさせ  
僕を助けようとはしない

奴らは僕を厄介者扱いし こう言う  
「きっとまた新しいお子さんができます。」

僕 何かいけないことした?  
お母さん 僕はいらぬ子なの?  
将来 科学者や  
医者になるかもしれないんだよ  
どうして気づいてくれないの  
僕の人生はあつという間に  
始まる前に終わってしまうってこと

時間は待ってはくれない  
お母さんも年をとっていく  
今だって月日はどんどん流れている  
本のページをめくる風のように  
健康な人達からみれば  
厄介者かもしれない

でも じぶんが僕と同じ目にあつたら  
あなたは消えてなくなってしまうんだよ

僕が多くの人に恵みを与えられるだろうに  
今からだって遅くはない  
他に方法はいくらでもあるから...  
奴らの言いなりにならないで お母さん!

の人に私は拍手を送る。

この問題は見る人によっていくつもの課題を抱えている。「十代の性」という観点で見れば、現代の若者の管理能力や責任感の欠如を嘆くことになるだろう。

「生産性の自由」に関わる問題と見る人は、うなずきながら「ほらみてごらん! コンドームを使わないからそんなことになるんだ!」と言うだろう。さらにはこれを行政機関の管理するべき問題であるという人もいるだろう。そして他の多くの人々にとつ

ては、これには三つの主な問題が潜んでいると感じられることだろう。少女が自分の身体を管理する権利、男性が父親として子どもの命を守る権利（そして義務）、そしておなかの中の子どもが生まれてくる権利である。どの見方が頂点に立つべきだろうか?どの権利が最優先されるべきだろうか?二つの権利（父親の権利と生まれてくる子ども（の権利）は一致している。今日の中絶を容認するような社会では、どんなに強力な権利であろうとも、大抵の場合は女性が自分の子どもを独占する権利に負けてしまう。ただ今回のケースは例外である。何はともあれ、子どもは無事に生まれることができたのだから。

ところが祝福の気分を味わう代わりに、少女とその両親は辛辣になっていった。少女の中絶を選ぶ権利を奪ったとして、少女のボーイフレンド、その両親、そして地域の役人を訴えたのである。少女の弁護士によると、「彼女たちは人生における最大の危機をなんとか乗り越えようと家族で力を合わせてきた。それなのに裁判所は少女を両親から引き離そうとしている」という。

この声明を読んで私は困惑した。文章を一行とばしてしまつたのだろうか。それとも記事を誤つた読み方をしたのだろうか。もしかしたら書き手が一番大事な情報を入れ忘れたのかもしれない。どうしてこれが「彼女たちの人生における最大の危機」になり得るのだろうか。

神はこれらの人々に奇跡のサインを送り（この出来事が奇跡でないことなどありえない。命を授かることのできた赤ん坊に聞いてみればいい!）、それに対して彼女たちはどう感謝の意を示そうとしているのだろうか。男性の「正義」にかこつけて神を無視しているだけである。

中絶の痛み、屈辱そして苦悩から逃れることのできた少女には、もつとありがたいと思いたい!と言つてあげたい。子どもを愛してあげなさい。とても貴重な贈り物を授かつたのだから、子どもをかわいがつてあげなさい。神の贈り物を粗末に扱つてはいけません。



# 人間の命はいつから始まるの？

人間の命はいつから始まるの  
だろうか。受精の瞬間から？そ  
う、科学的に言えば、受精の瞬間  
以外にはない。だが、過去に私  
は、魂は受精後のある時期に作  
られるという、個人的な宗教上  
の信念を持っていたことがある。

私達一人一人には、それぞれ  
自分の信念を持つ権利がある。  
しかし、個人の信念は個人のも  
のとしてとどめるべきである。  
他人の個人的な宗教上の信念を  
基に作られた決まりなどに誰も  
従いたくない。だからこそ、『人  
間の生命』を定義する法則を作  
るために、個人的な宗教上の信  
念を基にしたりはいけない。  
もっと知的な法則に基づいて  
「人間の生命」を定義付けること  
は可能だろうか？答えは、可能  
である。しかし、可能であること  
こそが、今日我々の大きな問題  
となっている。さまざまな大学、  
機関、神学校、医学分野におい  
て、人間の生命の定義付けにつ  
いて、幅広く哲学的な理論が繰  
り広げられている。人間の生命  
がいつ生まれかという定義の  
例をいくつか紹介しよう。

愛情のやり取りができたとき。

明確な自覚、自己認識、心臓が生  
成されたとき。明確な社会的行  
動、人間的行動が見られたとき。  
生物学上の特定時点で達したと  
き。たとえば、心臓が鼓動し始め  
たとき、脳波が観測されたとき、  
指紋が認識されたとき、生育力が  
保証されたとき、出産されたと  
き、など。あげればきりが無い。  
これらから、人間の生命を定義  
付けることはできるだろうか。こ  
れらには、共通する点がたくさん  
ある。しかし、まず、どれも証明  
できない。次に、これらを追及す  
る人たちは善意の人だが、自分達  
どうしはまったく違う意見を持  
つことができる。しかしながら、  
一つだけ賛成しあえることがあ  
る。それは、人間の生命を定義す  
るための法則を作る場合に、個人  
的な宗教上の信念を土台にすべ  
きではないということである。な  
らば、人間の生命の定義するため  
の法則を作る場合に、これらの個  
人的な哲学上の理論をも土台に  
するべきではないだろう。

私達全員が賛成でき、自然科学  
によって疑問のかけらもなく証  
明できる方法が一つだけある。そ  
れは、生物の本、発生学の本、人

間の生命について書いてある医  
学関連の本を開いてみなさい。  
どれにも、人間の受精卵の発達  
についての同じことが書いてあ  
る。既に証明済み一般によく  
知られている事実である。どの  
本も、人間は最初一つの細胞、受  
精卵であったことを、実に詳細  
に科学的に説明しており、その  
ただ一つの生命の始まりから現  
在に至るまで、栄養分と酸素以  
外は与えられないことが述べら  
れている。

私達は誰でも、一つの細胞か  
ら命が始まった。それ以後は、成  
長する以外に何もしていないの  
である。

医学博士ジョン・C・ウィルケ



## 胎児は痛みを感じるの？

昨年、私の左足がひどく冒さ  
れ、医者から足を切断する以外  
に方法はないから膝から下を切  
断するように勧められ、私は同  
意しました。

手術後六日がすぎても、まだ  
切断した部分の足の痛みを感じ  
ました。それも、ずいぶんと。医  
者は、この痛みは普通のことだ、  
術後の自然な経過で、足が治癒  
してきている証拠だと言いまし  
た。

しかし、このエッセイは私に  
ついてのものではありません。  
わたしと同様、切断を経験した  
人について書いたものです。た  
だ、私と異なっているのは、手術  
の前に麻酔もされなかったし、  
手術の後に痛み止めも与えられ  
なかったということです。

この驚異的な人達はいったい  
誰なのでしょう。古代の神秘的  
な修養をして、痛みを感じない  
ところまで精神や肉体をコント  
ロールできる、遠い国からやっ  
て来た超人達なのでしょう。か  
いいえ、その人達は私達のすぐ  
そばに住んでいるのです。実際、  
あなたがたの隣に住んでいて、  
これから麻酔なしで切断手術を

受ける予定かもしれませぬ。お  
そらく彼らは、何ヶ所も切断さ  
れ、バラバラにされるひどい苦  
痛にじっと耐えさせられるので  
しょう。全く痛み止めの恩恵も  
受けられずに。

私が今話題にしているのは、  
中絶される子ども達のことだと、  
きつとおわかりいただいている  
ことと思います。胎児が痛みを  
感じるはずがないと反論する前  
に、その議題に関する最近の証  
言を考察してみてください。あ  
るロンドンの病院によって依頼  
された研究によると、胎児は痛  
みを感じる事ができるという  
結論に達しました。その研究は、  
クイーン・シャーロット&チエ  
ルシー病院のニコラス・フィス  
ク医師によって行なわれたもの  
です。フィスク医師は、輸血のた  
めに胎児に針を刺したとき胎児  
のストレスホルモンの値が急激  
に上昇するのを認めたと報告し  
ました。痛みの刺激に対して、子  
どもや大人で同様の反応が見ら  
れることから、フィスク医師は  
胎児が痛みを感じる事ができ  
ると結論を下したのです。フィ

スク医師の同僚の中には、本音ではフィスク医師をバツクアツプする気持ちのある人がたくさんいると私は確信しています。

中絶反対論者は、中絶が子ども達を殺すだけでなく、子ども達に痛みを感じさせるものであることをかなり前から知っています。中絶は、拡張と排出、拡張と抽出というような、外科的なテクニクを使って行なわれま

のこともとても簡潔に表現して、「我々に命を与えた神は自由も与え給うた。この自由が神から授かったものだ」と我々が自覚しなくなった時、我々の自由は保証されるのだろうか。神は公正であり、神の正義が永遠まで知らん顔しないということを考える

ジャック・ヴォルツ

私が胎児の痛みに関するエッセイを書いたのには理由がある

のです。胎児が痛みを感じるという事実は、母親が子どもを殺すことを選ぶのをやめさせるに十分なのでしょうか。私はそうであってほしいと思います。神が言われたように、最後の審判の時に、自分自身に対する慈悲を求めらば、他の人に慈悲の心を示さなければなりません。

トマス・ジェファーソンはそ

# 望まれないで産まれた子どもたちは

## 固有に価値がある

私の年上の友達の三人目の子どもは望まれないで生まれま

た。彼女にとって妊娠は極めて難しい状態だったため、彼女は妊娠したことを知ったとき非常に心配した、と私に教えてくれました。それは一九五〇年代の出来事で、良きカトリック信者であるその友人は、結局、すぐに彼女の心の中の特別な存在となる男の赤ちゃんを出産しました。

彼女はこの話を私はまだ十代で、カトリック社会の中で産児制限と避妊が最新の議論のテーマとなっていた六〇年代にしてくれました。彼女の要点ははっきりしていました。彼女の望まれないで生まれた子どもは最も大切な贈り物だったということです。

「彼に望まれないで産まれた子どもだと言わないで」と彼女は私に言いました。

しかし、彼女の息子に黙っているように私に頼んだことが、望まれないで産まれたことが汚点であるような概念を私に植え付けました。

すぐに私は家族で四番目で一

番最後の子どもである自分自身が、望まれないで産まれた子どもであったのではと疑うようになりまし

た。もし母親が私のこの疑問を確証させたら、私は精神的に傷つくのでしょうか。結局、私が自然な家族計画の教師としての資格を得るため、必要な学業を終えて、やっと私の心の中にずうっと滞っていた質問を母親にぶつけることができました。

「確かにあなたは望まれないで産まれた子どもだ」と母親は言いました。

彼女の答えは別に驚くべきことではありませんでした。私の予想通りだったからです。私が最も驚いたのは、母親の言葉に対する自分自身の反応でした。私は身の自由を感じたのです。

私は、両親に期待されて生まれたのではなく、もっと崇高な意志によって生まれ、私の生命そのものが意味を持っているということを知り、意気揚々としました。

更に私は、予定外でありながら自分を生んでくれた母親と、私をここまで愛情込めて育てて

くれた父親に深い感謝の気持ちでいっぱいになりました。すでに八十代になった両親は私の要求に熱心に答えようとしてくれます。私は二人をとっても愛しています。

私の反応は、私の生命と両親の愛情への感謝の祈りに変わりました。私は、もし自分が望まれない子どもを授かったとしたら、私と夫はその子どもを受け入れ、世話をし、私の両親がいつも私に注いでくれた同じ愛情を注ぐことを祈願しました。

「エロスの敵」という本に、マギー・ガラファールは私たちの世代が「計画性のある両親はよりよい両親であり、『偶然』産まれた子どもたちは、計画的に産まれた子どもたちよりも価値が低く、より不幸で、より望まれない」という、危険な幻想を創造したと書き記しています。

皮肉にも、社会がこの幻想に深くはまるほどに、私たちは全ての動物生命の固有の価値について、今までにないほど熱心に認めるよう要求されるのです。モンセニョール・チャールズ・マー

フィーがワシントンで述べた、環境に関する最近の会議（フロリダ・カトリックでのレポート、一九九一年二月二十二日）での一例をここに引用します。私たちが人間が動物たちに注ぐべき愛情について語る時、モンセニョール・マーフィーは、動物は私たちにとつて有益かどうかに関わらず価値があると述べました。「動物は神との関係故に、存在する権利を保有するのです」と彼は述べました。

私は動物の生命の価値を議論するつもりはありません。私が不合理だと感じるのは、法律と高等裁判所が全ての人間の固有の価値を認めないということです。社会は動物に尊厳を与えることを要求するのにも、まだ胎内にいる人間を拒否するとは、何かがひどく間違っているように思えます。

胎内にいる人間、たとえそれが計画的であろうと非計画的であろうと、望まれようと望まれて無かるうと、健康だろうと病気だろうと存在する権利を有するので。彼らは、真つ先に神に属するので。

モンセニョール・マーフィーの論述とは矛盾しますが、人間のみが生きる権利を持つもので、動物は権利を持ちません。動物は人間ではないからです。しかし、動物も神の創造物であり、私たちはそれを有効的に使い、悪用しないという責任があるのです。聖書は魚と肉を食べることを完全に正当だと認めています。

エレナ・ガルシア

## 若者の考え

### 「沈黙の叫び」ビデオ

#### 赤ちゃんも生きたい

私は、初めて赤ちゃんが殺されるのを見ました。親の勝手な都合で殺される。とても悲惨なことだと思いました。お腹のなかにいる赤ちゃんは、まだ言葉を発することが出来ないけど、一生懸命逃げる姿を見て、心のなかの叫びが聞こえました。赤ちゃんも一人の人間なんだ。自分も生きたいように、赤ちゃんも生きたい

たいんだ。そう思いました。

女性は簡単に中絶を考えるけど、どんなに大変なことか、どんなに傷つくか分かっていないと思います。自分は赤ちゃんを殺したつていうことが一生頭から離れないと思うし、子どもを見るたびに思い出すと思います。ビデオの中でも苦しんでいたし、後悔していた。だからよく考えて、なるべくなら産んだほうがいいと思いました。

K.E.さん「高三生」

#### 母親の顔も見ずに

すごくショックを受けました。ビデオを見ている間も怖くて苦しくなりました。正直に言って、見なければ良かったと思います。でも一つだけ見て良かったと思つたことは、胎児がお腹の中で必死に逃げている姿です。胎児も私達と同じ人間なんです。必死に逃げるのは当たり前です。けれど、一度も母親の顔を見ずに殺されるのです。私は母親だけがかわいそうと思つていましたが一番かわいそうなのは殺された子どもです。

私はこのビデオを女性よりも男性に見てもらいたいと思います。中絶の苦しみを感じているのは女性ばかりで

す。中絶がどのようなことが、正しく理解して、胎児も一人の人間だということを知って欲しいです。

S.M.さん「高三生」

#### 声なき叫び

私はあのビデオを見たくはありませんでした。今でも見ないほうがよかったのじゃないのかなと感じています。あの内容は女性に対して、ひどく心を傷つけてしまったような気がします。でも、一つの小さな命の尊さを改めて実感しました。

人工妊娠中絶、それは一つの殺人であると思います。命が消える前の「声なき叫び」は誰にも気付かれることなく、母親であっても気付けなかった。そういう女性も多いはず。胎児は立派な人間であり、喜びや苦しみも感じているのです。命がある。決して消してはいけない大切な尊い人間なのだ、深く深く教えられました。最も身近であり、自分の命を作ってくれた父親、母親から、結果的には殺された胎児。いつかきつとこの世に生まれて幸せをあげたい。

K.T.さん「高三生」



# ついでに命の重さとは？

生まれたばかりの子どもを、ごみ袋に入れごみ置き場に投げ捨てたら、その母親は殺人罪に問われる。同じ女性が、前日に胎児を傷つけ吸い出し、ごみとして処分するた

め病院を訪れたとしても、最も軽い罪にも問われない。大事な何かを見落としてはいないだろうか。かつて、社会に生きる人はみな価値があり、神聖な存在と考えられていた。なぜなら生命は神から派生し神に付随し、神に帰するものと見なされていたからだ。命は賜物であった。神の手によって造られたのだから、すべての命には価値がある。

く自信がもてなければ、その命をなきものにし、不都合を遠ざけることもできる(中絶本人が必要と考えることによる)。

神の姿に似せてつくられた価値

の前にある。調和を失い、神を排除し、人間を誤った位置においている。正しい心のより所をなくし、周囲の人間が本来もつ価値を無視している。病人や高齢者や胎児のことを無くしていいものと考えている。これが進歩なのか？

では、我々をてこずらせ余計な出費を促し、頭を悩ませたり消耗させる人々の運命は？例えば、幼い子どもや、闘病中の身内や、理想と異なる配偶者は厄介者ということになる。

計な出費を促し、頭を悩ませたり消耗させる人々の運命は？例えば、幼い子どもや、闘病中の身内や、理想と異なる配偶者は厄介者ということになる。

「お互いを排除する」社会になった。年老いた両親から食料を奪い、子どもをほったらかして自分の生活を優先し、まず最初に死ぬべきは高齢者や病人や身障者と考えた。「この状況は我々の今の社会とどれほど違うでしょうか？」と氏は問う。

創世の書には、神が自分の姿に似せて人間を創造したとある。我々には創造物としての価値があり、さらに自分の中に神の姿を見いだせる点で、その価値は高まる。自分の中に聖なる姿が刻まれているのだ。故にいつの世も、意図的に人の命を奪うのは罪と見なされてきた。「人を殺すことは、神が自らのかたどりとしておつくりになった創造物を殺すことだ」と創世の書にあるように、殺人は厳禁である。

最後に、中絶や自殺補助は法律的な問題ではなく、神学的な問題である。神を大事にすればこそ、自分自身や隣人をも大事にできる。いいかげん考え直してほしい。すべての人間の中に創造主である神の姿を思い描き、いのちを何よりも強く敬うべきだと。

今日、お互いを神の創造物としてではなく消費物として考える傾向にある。人生の伴侶は自分の要求を満たしてくれるか否かを基準に選

び、一緒にいて得な相手と友達になり、あまり負担にならないようなら子どもが欲しいと考える。お年寄りも素直に言う事を聞いてくれたら大事にする。

「お互いを排除する」社会になった。年老いた両親から食料を奪い、子どもをほったらかして自分の生活を優先し、まず最初に死ぬべきは高齢者や病人や身障者と考えた。「この状況は我々の今の社会とどれほど違うでしょうか？」と氏は問う。

啓蒙思想が聖書の教えにとつてかわる

デヴィッド・ヘンダーソン

今日、お互いを神の創造物としてではなく消費物として考える傾向にある。人生の伴侶は自分の要求を満たしてくれるか否かを基準に選

び、一緒にいて得な相手と友達になり、あまり負担にならないようなら子どもが欲しいと考える。お年寄りも素直に言う事を聞いてくれたら大事にする。

「この状況は我々の今の社会とどれほど違うでしょうか？」と氏は問う。

西欧文化は、聖書における人間の不可侵の価値の認識に基づいていた。しかし、進歩の勢いにつれて、神の絶対的価値が取り払われ、人間が神の座に君臨した。その痛ましい結果は、今日、我々の目

# 胎児が存在するという現実

私達が一人の胎児の存在を、(その妊娠が望まないものであったり、障害を持つ子になる可能性があるという理由で)無視する時、それは生命の創造者としての神への敬意を欠くことになるということを知っていましたか。

これまで、例えばレイプされた場合の中絶は「正しいとか、子どもに障害があるとわかっていている場合の中絶は「正しい」のだとか、周囲から何度も聞かされてきた事でしょう。また、母親が子どもを望んでいない場合は、中絶をしても罪にならないのだ、とも聞いた事があるでしょう。

このようなことを相手と一緒に真剣に考えることが出来れば、真実は真実であって変わることはないということを相手に伝えることが出来るはずで、中絶

はこの世に出る前の人間に對する意図的な殺人であり、生まれる前であれ後であれ、殺人を犯すことが正しいはずはありません。

神は、私達が完全な人間になるために道徳律をお作りになったのであり、それが変化することなどあり得ません。それを選択するかどうかは、あなたの自由意志に委ねられています。

1. レイプによってできた子とそうでない子との違いは何でしょう？レイプでできたからといってその子は突然エイリアンになり、そうでなければ普通の人間になるというのでしょうか。レイプによって生まれた子にも、他の人間と同様の権利はあるではありませんか？

2. 障害を持つ子どもの場合はどうでしょう？友達

にこう聞いてみて下さい。

「障害を持つ14歳の子どもを殺しても、罪にならないと思いませんか？」障害児を

中絶することは、それと同じ事です。子どもが生まれる前か後かで違いがあるはずはありません。どのような経緯で妊娠したにせよ、子どもは子どもです。すべての子どもをあらゆるタイプの中絶から救わなくてはなりません。ある子どもは殺しても良いがそれ以外はいけなと言つのは、子どもを殺してもいい場合と悪い場合があると言っていることに他なりません。殺人は、正当防衛の場合を除いてすべて間違っているのです。

「あなたは私の腎をつくり、母の胎内に織りこまれた。恐るべき驚異のあなたを、私はたたえる。そのみ業は不思議で、あなたは私の魂を知りつくされる。私の骨はあなたに隠されていない、わたしがひそかにつ

くられ、地の深みでぬいと

りされたとき。」(詩篇 三九：13〜15)

「こうして、人間のいのちを守るようにという神のおきての深遠な要素は、すべての人に対して、またすべての人のいのちに対して、敬意と愛を示すようにという要求として現われます。」(ローマ法王、ヨハネ・パウロ二世「いのちの福音」41)